

# 化粧品の安全性評価

秋田を創業の地に選び、経営者として第一歩を踏み出した女性がいる。業務内容は、化粧品メーカーが開発中の新商品の安全性を確認するモニター（クリニカル）試験の受託。県民一人を目標としたモニター集めと並行し、先週からはよいよメーカー回りをスタートさせた。受注獲得に向け奮闘するベンチャー企業「インターフェイス」（秋田市山王）の代表取締役・野澤一美さん。この営業活動を追った。

## 奮闘する女性起業家

二十一日午後。野澤さんは神奈川県小田原市にあるカネボウ化粧品（本社・東京）の研究所にいた。同社製品のほとんどが、研究所と同じ敷地内にある小田原工場で製造されている。この日の商談の相手は、開発段階にある化粧品の有効性や安全性評価を担当する研究員の面々。

野澤さんはこう切り出した。「会社は六月に設立したばかりだが、米国の試験受託機関（ラボ）で十三年間、技術面やモニター集めのノウハウを学んできた。経験値では



性の皮膚の人を集められるか」「小さい子供を集められるか」「しわがある人を集められるか」といった問いかけが二時間半にわたって続いた。

先行する同業者に負けたくない。「勤勉な秋田県民のモニターを集め、信頼できるデータを欧米並みの低価格で提供する」。これに対し、白衣姿の研究員からは「アトピー

化粧品メーカーが新商品に「荒れ肌改善」などの効能を表記するには、該当する成分の効能について厚生労働省の認可を得る必要がある。申請の際、第三者機関による解析結果を添えないと、医薬部外品の新規有効成分として認可されにくい。インターフェイスの

## 世界視野に事業展開

よつな外部の試験受託機関が必要となるのだ。日本の化粧品業界におけるクリニカル試験の受託市場は、平成七年の製造物責任（PL）法施行などに伴い、メーカー側に高度なリスク管理と品質保証が求められるようになったことから拡大しつつある。ただし現状は、日本より三十年以上も先行して製造物責任の概念が定着している欧米の市場が圧倒的に強く、国内の化粧品メーカーは、多くの試験を海外のラボに委託している。

クリニカル試験の重要性について、カネボウ化粧品研究本部研究企画グループ長の四宮達郎主席研究員はこう説明する。「激しい企業間競争の中で、お客さまに支持される商品を出すためには効能の表記が不可

欠。現在は欧米の機関への委託も多いが、国内で柔軟に対応してくれるラボが増えることはありがたい。インターフェイスには、特定の試験分野に強みを発揮してくれるラボになってほしい」



野澤さんは埼玉県出身。バブル期を不動産金

融大手のOLとして過ごし、二十七歳で渡米。タラスの語学学校に通う傍ら、日本語新聞の広告で偶然見つけたアルバイトに出した。

その後二年間はフリーの化粧品コンサルタントとして日本と米國を往復。秋田出身の学生時代の知人から、県庁第二庁舎にあるあきた企業活性化センターの創業支援室を紹介され、色白できめ細かい肌を持つ女性が多い秋田と、肌に関係する自分のビジネスに縁を感じ、入居を決断した。

現在のスタッフは二人。事業計画では、三年後の売り上げ目標は九千万円。化粧品市場のグローバルな窓口として、世界各国のメーカーから試験を受託する計画だ。米國でコンピュータープログラマーとして働く米國人の夫とあって、毎日二時間ほど電話で話をし、「君にはスキルとチャンスがある。可能性にチャレンジするべきだ」。夫の言葉に背中を押され、野澤さんは歩き始めた。

（政治経済部・阿部洋子）試験の受託に向け営業活動を開始した野澤さん（左）と小田原市のカネボウ化粧品研究所

2006年 9月 25日 夕刊

AKITA SAKIGAKE SHIMPO

秋田新報

●ホームページ <http://www.sakigake.jp/>

●発行所 <http://www.sakigake.jp/>